

情報通信審議会情報通信技術分科会 ITU 部会  
周波数管理・作業計画委員会第 6 回会合議事概要

1 開催日時

平成 26 年 9 月 9 日（火）16：00～18：05

2 場所

総務省（合同庁舎 2 号館）10 階 共用 1001 会議室

3 出席者（敬称略）

・専門委員：

小林 哲、阿部 宗男、岩間 美樹、加保 貴奈、中川 篤、  
西田 幸博、橋本 明、正村 達郎、矢野 由紀子

・関係者：

荒田 慎太郎、石田 和人、岩田 康広、江崎 正、小笠原 守、金子 雅彦、  
亀谷 収、河合 宣行、北澤 弘則、木村 大、工藤 正博、久保田 文人、  
河野 健司、河野 宇博、小林 栄一、庄木 裕樹、高尾 浩平、高田 仁、  
塚本 尚樹、鞆田 健、中村 勝英、野田 華子、博多 宣雄、宮寺 好男、  
水池 健、

・事務局：

新田 隆夫、岩間 健宏、塚田 淳一、桐山 真美、大石 通明、斧淵 康久、  
佐々木 亮

4 議事

1 SG1 ブロック会合について

- (1) SG1 ブロック会合（2014 年 6 月）の結果
- (2) 次回会合に向けての議論

2 RAG 会合について

- (1) RAG 会合（2014 年 6 月）の結果
- (2) 次回会合に向けての議論

3 その他

5 議事概要

議事に先立って、事務局より、事務局の変更について紹介があった。

(1) SG1 ブロック会合について

資料 6-1、6-2、6-3 及び 6-4 の ITU-R WP1A 会合（2014 年 6 月）、WP1B 会合（2014 年 6 月）、WP1C 会合（2014 年 6 月）、SG1 会合（2014 年 6 月）の結果について、事務局より説明が行われた。

質疑応答は以下のとおり。

(専門委員) WP1A 報告書の 2.2「無線通信業務の保護」項のタイトルに Rec. ITU-R M.1076 が記載されているが、本勧告は WP5A の勧告であり、この場では議論されていないと思われるため、削除してはどうか。

(事務局) 確認する。

(専門委員) WP1A ではワイヤレス電力伝送 (WPT) のレポートが作成されたが、事前の対処方針では作業文書を暫定レポート案にすることを目標としていたが、会議の流れの中で、作業を前倒しし、レポートを承認するまでに至った。SG1 でここまでスムーズに作業を進めることができたことは、非常に意味のあることかと思う。

(専門委員) SG1 報告書の 1.3「WP1Cからの勧告案」項に、脚注2の説明に「AAP」という表現を用いているが、現在は AAP の手続きは廃止されているため、AAP という用語を使用するのは適切でないのではないか。PSAA ではない手続き (2段階郵便投票) をとることが承認された等と記載してはどうか。

(事務局) 確認の上、修正する。

(専門委員) WP1B 報告書の 3.4「デジタルディビデントに関する PDNRep.」とあるが、どういう観点でのデジタルディビデントか。特定の周波数帯や業務に係るものか。

(関係者) 表-3 の出力文書一覧のタイトルにあるとおり、VHF 及び UHF 帯の地上デジタルテレビジョンに係る議論と考えられる。

(専門委員) WP1C について、日本寄与文書が好意的に受け取られているようだが、勧告の改訂に向けた文書は出力されていない。日本の研究成果を盛り込むために次回以降どういう対応を考えているのか。

(関係者) 勧告 SM.1753 について、日本の寄与文書案はすでに反映されており、勧告の改訂が連続となるため今回は情報文書として入力することとした。今回の成果は WP3L に電波雑音の測定に関するリエゾン文書の発出である。今後は、勧告の改訂に向けて動いていく。

(専門委員) 測定結果であればレポートとしてまとめてはどうか。レポートであれば毎回改訂することができる。

(専門委員) いきなり勧告ではなく、有用なものはレポートとして残すというやり方もあるので、今後の進め方として検討頂きたい。ただし、最終的な目標は勧告なので、レポートはそれに向けてのツールとして考えるべきである。

(事務局) 本日取り上げたもののなかで、WPT や 275GHz 帯以上の能動システ

ムの関係は、アジアでも並行して動いている。日本からの前向きな提案に賛成してくれそうな国、または今後調整をしていかないといけない国、業界があれば教えていただきたい。

(専門委員) テラヘルツは RR 上は能動業務が認識されておらず、WPT は RR にはない電波の使い方であるため、どうしても保守的な意見が出てくるので、仲間づくりが非常に重要である。

WPT は日本だけで終わらすのではなく、日中韓情報通信標準化会議 (CJK) において日中韓で意思を共有し、AWG に発展させて大きな反対がないことを確認した上で、レポートを ITU に入力し、参加者の理解が得られた。反対する国は、技術的な内容が分からず反対していたため、日本から情報を出すことで議論の土台ができた。引き続き、CJK、AWG の動きを大切にしつつ、韓国、中国と協力して進めており、非常によい状況である。また、ITU においても根回しを行い、オランダは前向きな対応であり、フランスも理解を示してくれた。次回 AWG でさらに前へ進めることを期待している。

テラヘルツについては、ITU でアメリカから強いサポートがあったが、これも事前の根回しによるところが大きい。

(関係者) ITU の場では各国の状況が異なっている。例えば、中国の産業界は積極的に動いているが、政府はネガティブである。そういうところへ根回しを行い良い方向にいけばと考える。

(専門委員) WP1A は政府関係者が多い中で、EV の件については民間出席者が会合に出て発言していたことが非常に印象に残っており、産業界の本気の熱意が伝わった。

(専門委員) WPT に関連した話だが、太陽光発電衛星等のビーム技術に関するレポートの寄書には、本年の会合ではどこからも寄書入力はなかったが、JAXA より、次回会合への入力を検討している旨の意思表示があったので、共有する。また、WP1A 報告書の 2.5 節のレーダー周波数利用効率向上のための改良された帯域外ロールオフ特性については、従前我が国が主導していたが、リエゾン文書をやりとりした WP5B では消極的な反応であったことから、WP1A においても休止状態に入ったので、ご承知おきいただきたい。

## (2) RAG 会合について

資料 6-5 の RAG 会合 (2014 年 6 月) の結果について、事務局より説明が行われた。

質疑応答は以下のとおり。

(専門委員) RAG 報告書の 3.1 節では、アカデミアの参加を推奨しているが、学会活動のようになり、電気通信の発展に貢献しなくなってしまうこと

を危惧している。これまで RAG では、手続き簡素化などを担ってきたところだが、今後、RAG への寄与について、より積極的に考えて頂きたい。

(専門委員) 研究課題がなくとも、各 SG の ToR に係る話であれば検討できるため、研究課題無しの研究について、SG より上のレベルで承認を得ることまで必要なのかという気はする。RA ではなく、SG レベルで研究課題を決めても良いのではないかと考える。

(専門委員) 過去には全ての研究に研究課題が必要だった。現在はフレキシビリティを増すために変わったが、研究課題を大切にする考え方は残っており、会期をまたぐ研究には、研究課題が必要である。

(専門委員) ITU-R は、ITU-T のように、各 SG にレポートをつけて期限を区切って検討を加速させるような取組はあまり行っていないが、重要な研究課題についてはそのようなことも考えても良いと思う。

(専門委員) ITU-R の研究課題の中には、干渉問題や周波数配置のようにコンスタントな研究課題と、一時的なトピックがある。現在は、後者の方は研究課題なしでも研究を行えるようにしてフレキシビリティを持たせる方向に向かっている。

(専門委員) RAG 会合に提出する寄与文書の〆切りがはっきりしない。ITU-R 決議 1-6 によれば、翻訳が必要であれば会合の 3 ヶ月前とある。

(専門委員) 翻訳が不要であれば、RAG 会合に提出する寄与文書の〆切りはルール化されておらず会合直前でも受け付けている。RAG 会合以外の寄与文書の〆切りははっきりしている。

(専門委員) ITU-R 決議 1-6 には、ITU-R での作業方法が規定されている。皆様におかれては、ITU 以外の国際会議のより効率的な作業方法といった話でもよいので、改善に向けてぜひ指摘を頂きたい。

### (3) その他について

また、次回の周波数管理・作業計画委員会のスケジュールについて、RAG 会合に提出する日本寄与文書の有無及び ITU への寄書提出期限によるが、3 月下旬を目途に開催する予定であることが周知された。

以 上